様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　４月　１日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2006～2008
課題番号：18730443
研究課題名（和文）祭りにおける意識変容と象徴作用に関する分析心理学的研究
研究課題名（英文）An Analytical Psychological Study on the Relationship between the Transformation of Consciousness and Symbolic Action in Festival

研究代表者
橋本　朋広（HASHIMOTO TOMOHIRO）
大阪府立大学・人間社会学部・准教授
研究者番号：20324733

研究成果の概要：祭りの調査研究によって臨床心理学的象徴研究を進展させたと考えられる。具体的には，各季節の祭りにおける代表的象徴を明らかにし，各象徴を使用した代表的祭りを調査した。そして，祭りにおける人間と象徴の相互作用を考察し，祭りにおける象徴的時空間の構成過程，通過儀礼におけるリアリティ変容の心理学的構造，春の火祭における火のイメージの心理学的構造,象徴的体験を分析する枠組みとしての象徴的現実の構造解析などを行った。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,000,000	0	1,000,000
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	2,300,000	240,000	2,540,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学
キーワード：祭り，意識変容，象徴作用，分析心理学

１．研究開始当初の背景

臨床心理学の一分野である分析心理学では、無意識による象徴の産出に注目し、神話、昔話、宗教、儀礼などの象徴研究を通して意識の変容過程を研究してきた。その結果、心理療法の変容過程で生じる象徴が通過儀礼と類似の構造を持つことを明らかにし、心理療法を通過儀礼としてとらえる考え方（イニシエーション・モデル）を発展させた。

しかし、従来の分析心理学における諸研究は、象徴の意味内容や構造を理解することに重点があり、通過儀礼の象徴体系が意識に与える直接的な影響過程を理解するには不十分であった。

この点を明らかにするため、筆者は，通過儀礼への関与観察を行い、そこで直に意識の変容を体験し、それをふまえて意識変容に及ぼす象徴の作用を考察しようと考えた。さらに，通過儀礼における象徴作用と心理療法における象徴作用の共通点や相違点を検討しようと考えた。

２．研究の目的

１に述べた背景を踏まえ，本研究では、典型的な通過儀礼の構造（分離－境界－統合）を持ち、劇的な象徴体験によって集団の意識状態を変容させる祭りに注目した。そして、祭りへの関与観察を行い、その中で直接的に象徴を体験し、その体験を分析心理学の手法によって分析し、意識変容に及ぼす象徴の作用を解明することを目的とした。また、祭りにおける象徴作用と心理療法における象徴作用の比較考察を行うことも目的とした。

３．研究の方法
(1) 調査対象の選択
　まず，調査対象となる祭りを選定した。近畿二府五県の代表的な祭を紹介した文献から祭りを収集し，祭りごとに主な象徴を抽出した。そして，各象徴が使用される回数を月別に算出し，各月で特に使用頻度の多い象徴を季節の代表的象徴と考えた（４の(1)を参照)。その上で，各季節の代表的象徴を用いた祭りの中から特に有名な祭りを選別し，調査対象とした。選別に際しては，国あるいは都道府県の無形文化財に指定されているものを優先した。

(2) フィールド調査
　平成 18 年 (2006) 2 月から平成 20 年 (2008 年) 5 月まで以下の祭りを調査した。
＜平成 18 年度＞
2 月：御燈祭り（神倉神社：和歌山県新宮市）
3 月：日牟礼の左義長（日牟礼八幡宮：滋賀県近江八幡市）
＜平成 19 年度＞
6 月：磯部の御神田（伊雑宮：三重県志摩市）
7 月：天神祭（大阪天満宮：大阪府大阪市）
8 月：東盆踊（円光寺：大阪府貝塚市）
10 月：上野天神祭（上野天神宮：三重県伊賀市）
＜平成 20 年度＞
4 月：日吉山王祭（日吉大社：滋賀県大津市）
5 月：多度の上げ馬（多度大社：三重県桑名市）
これらの祭りは，上記(1)の「調査対象の選択」の方法にしたがって選ばれた祭りである。調査では，それぞれの祭りを特徴づける象徴に注目しつつ，それらの象徴に関わる人間のパフォーマンスを観察し，その様子をビデオ撮影した。また，祭りの場の雰囲気などをフィールド・ノートに記録した。

４．研究成果
(1) 祭りの代表的象徴の抽出
　近畿二府五県について、都道府県別に代表的な祭りを広範に取り上げている図書を複数収集し、そこで紹介されている祭りの概要を全て要約した。祭りの総数は 388 件であった。そして，すべての祭りについて、祭りを構成する代表的象徴を抽出した。
　その結果、食べ物に関する象徴 9 個、道具に関する象徴 31 個､装飾に関する象徴 7 個、人間や動物に関する象徴 35 個、神輿や山車など乗り物に関する象徴 5 個，火と水と土など四元素に関する象徴 10 個、踊りや舞など芸能に関する象徴 33 個が抽出された。
　こうして抽出した象徴を月別に集計し、頻発に使用される象徴を見ると、近畿の祭りにおいて各季節で使用される代表的な象徴が明らかとなった。それによると、新年（1～2 月）には「火」や「松明」、春先（4 月）には「神輿」、初夏（5～6 月）には「馬」や「御田」、夏（7 月）に「神輿」、盆（8 月）に「盆踊」、そして秋（10 月）に再び「神輿」が、各季節の祭りで使用される代表的な象徴として抽出された。

(2) 祭りにおける象徴的時空間の構成に関する心理学的解明
　平成 18 年度には，フィールド調査に先立ち，上記(1)の「祭りの代表的象徴の抽出」以外に，本研究以前に取り組んだ祭り調査をふまえ，祭りの場における象徴的時空間の構成に関するメカニズムを考察した。そして，その結果を日本箱庭療法学会第 20 回大会で発表した。
　それによれば，祭りの過程では、自然界に存在する存在者に向けて様々な行為が行われる。自然的存在者は、様々な仕方で働きかけられることによって象徴的存在者として現出し、それの向こう側にある超越的な次元を開示する。具体的には、自然を産出する力＝カミとして扱う祭司などの行為によって、「自然／人間」の対立する二項関係は、「カミ／媒介者／人間」という三項関係に変換され、自然は対話可能な主体となり、両者の関係は弁証法的なものになる。つまり、祭りとは、媒介者の象徴的行為によって自然と人間との弁証法的関係を形成する営みであると考えられた。
　媒介者の主な行為は、①招く（迎える)、②もてなす（交歓する)、③送る（帰す）の三要素から成ると考えられた。祭りでは、これらの行為によって産出する力としてのカミが直接的に体験される。参加者は、招く、もてなす、送るという媒介者の行為によって構成される場の集合的運動に参加することで、生々しい運動感覚の中で直接的に集合的な力を体験する。その力は、個人を超えているがゆえに圧倒的であるので、参加者はヌミノーゼの体験をする。
　招くという行為では、参加者は、自我のはからいを捨て、象徴に向けて自己を投げ出すことで、未知の次元に開かれる体験をする。日常の道具的な関心が消え去ると、その場には日常とは異なる存在様式を持つ世界、つまり、統覚によって構造化された日常世界とは異なり、音や色や運動感覚が生々しく飛び込んでくる世界が開かれる。そうして現出する美的で躍動的な時空間に即して、さらに音色や色彩や運動を増幅させていくと、次第に歓喜が高まり、躍動する超越的な力が感じられる。そして次に、こうして体感された力を、森羅万象の彼方へ送り帰すと、森羅万象は対話可能な単一なる主体に変容し、人間は自然と共に在るという感覚を実感する。
　祭りでは、象徴に対する媒介者の行為が場

の運動を構造化し、参加者は場の運動に参加することで超越的次元との弁証法的関係を形成すると考えられた。

(3) 従来の通過儀礼論の理論的整理

平成 19 年度には，祭りのフィールド調査を通して，通過儀礼が異なる二つのリアリティを弁証法的に開示することが見えてきたので，祭り分析に取りかかるための基礎として，従来の臨床心理学的イニシエーション論（通過儀礼論）を再度整理することを試み，その成果を『大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要』（創刊号）に発表した。

それによれば，河合隼雄は，分離や統合を重視する「物語的イニシエーション・モデル」の欠点を克服し，過渡における実存の運動を捉えようとした。そして，河合俊雄や岩宮恵子によれば，過渡における実存の運動は，没入や否定を契機として展開する見える身体と見えない身体の弁証法として捉えられる。そして，これらの「実存的イニシエーション・モデル」は，動物から人間になったり，自然的存在から文化的存在になったりすることを重視するのではなく，むしろ動物／人間，自然／文化，さらには生／死といった二項対立を超越した経験に開かれていくこと，あるいは，無限なるものと有限なるものが相互に包摂し合うような経験，言い換えれば全体と部分が一致するような経験に開かれることを重視する。

宗教学者の中沢新一は，これらの考え方をより論理的に展開している。すなわち，イニシエーションの本質は，「対称性」の世界を開示し，それを「非対称性」の世界と結びつけることである。中沢は，イニシエーションにおいて狩猟民が人食いの怪物に食べられ，再び怪物から生まれ出ることに注目し，イニシエーションが食べるものと食べられるものの間に対称性の関係を成り立たせることを指摘している。つまり，食べるものが食べられるものになり，食べられるものが食べるものになることによって，両者は互いに同質なものとなり，両者の交流には尊敬と感謝が生じるのである。また，食べられたものが人食いとして再生するという点にも注目し，そこに食べられるものが食べるものであり，食べるものが食べられるものであるという部分と全体の一致という論理が成り立っていることも指摘している。つまり，狩猟民のイニシエーションは，食べられるものと食べるものの同質性を実感させることで，非対称性の世界での営みである狩猟を対称性の論理によって包摂し，非対称性の世界の現実の在り方そのものを変容させるのである。

これらの先行研究から，通過儀礼における体験の変容を考察する際，見える身体／見えない身体，対称性／非対称性といった概念によって捉えられる二つの実存様式の弁証法的運動を見極め，その運動のなかでどのように対称性の論理が非対称性の論理を包摂していくかを見極めるのが重要であることを明らかにした。

(4) 「御燈祭り」「左義長祭り」の分析

平成 20 年度は，5 月にはすべての祭りの調査を終了し，その後から調査した祭りの分析に取りかかった。まず，「御燈祭り」と「左義長祭り」を分析し，その成果を日本箱庭療法学会第 22 回大会で発表した。

そこでは，二つの祭りにおける火の体験を現象学的・分析心理学的に分析し，象徴としての火を構成する実存的運動およびその運動の内部での火の作用について考察した。

その結果，火についての象徴的体験，象徴としての火の作用，および火の象徴的体験を構成する実存的運動について，以下のような知見が得られた。

①否定する火

火は，われわれの関心を拒絶する。それは刻々と変化する。自由に躍動する。対象として固定できず把握不能である。猛烈な熱さは近寄ることを拒絶する。火を前にして，われわれは完全に自我の能動性を封じられる。火の圧倒的な否定力は自我の息の根を止める。ここにおいて，否定する火がヌミノースを放ちつつ現れる。

②包摂する火

停止させられた自我の働きをみずから捨てる時，包摂する火が現れる。自我の能動性を放棄し，激しい炎に身を投げ出す時，世界と我との境界が燃やされ，放射してくる光，無限の暖かさがわれわれを包む。

③躍動する火

暖かい光に包まれる時，光の内側から飛び出す動きが生じる。われわれは外へ押し出され，踊り出す。踊りは，われわれを漲らせる。われわれは自由に躍動する火となる。包摂する火は境界を失わせ，暖かさと輝きの中で永遠を持続させるが，躍動する火は，四方八方への飛び散りにおいて，見えない向こう側としての未来を生み出す。ここには時間発生の原体験がある。

④燃やし尽くす火

燃やし尽くし，みずからも燃え尽きる火は，殺すものでもあり，殺されるものでもある。明るみとしての世界を開く圧倒的な輝きは，みずからを食い殺し，自分自身を暗闇の内部へ収束する。生命的な世界は，無限の広がりであると同時に無限小の点でもある闇の内部へ消えていく。そこは動きのない無時間，永遠の持続もない無。われわれもまたそこへ消えていく。ただし，逆説的にも生命の躍動と共にある喜びと平穏の中で消えていく。そ

して，生命を秘める闇，生を内に含む死，死をみずからの内に含む生が直観される。
　以上の記述が示すように，春の火祭は，死から生まれる躍動，死に回帰する躍動という生命の永遠回帰を直観させ，われわれが見えない未来へ飛躍するのを勇気づけ，彼方に自己の終末と完結を予感させつつ，その手前にあって見えない向こう側へ躍動する現在―すなわち萌え出でる春―を創造するのである。

(5) 象徴的現実の構造解析
　平成 20 年の後半には，祭りの分析と並行して，人間と象徴の相互作用を考察するための分析枠組みの開発のために，象徴的体験において開示される象徴的現実の構造を理論的に解析することに取り組んだ。そして，その成果を『大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要』（第 2 号）に発表した。
　それによれば，象徴的体験とは，世界や世界内部の存在者を外在かつ内在として見る体験である。したがって，象徴というものは決して実体としては存在しない。現象学的には，「象徴的」という言葉は，単に対象として構成されたノエマの性質を指すだけではなく，それ以上に対象に関わるノエシスとしての主体の在り方，すなわち対象を内在かつ外在として見る見方を指すのである。通常われわれは世界を外なるものとして体験している。しかし，そのような世界は，世界を外在として体験する主体の在り方に相関的に現れたものであって，その同じ世界はある瞬間，すなわち，それが内在かつ外在として体験される瞬間，象徴的なものになる。だからこそ，日常の最中でも象徴的体験が生じ得るのだし，同じものを見ても人によって象徴的体験が生じたり生じなかったりするのである。
　象徴的体験において，われわれは，客観的現実としての外在と想像的現実としての外在を体験している。客観的現実の現実性は，物質＝身体による存在分節，主語的論理や因果性による現象把握などを契機として成り立つ。想像的現実の現実性は，情動＝身体による存在分節，述語的論理および共時性と対称性による現象把握などを契機として成り立つ。両者はともに，その内部においてそれ自体の現実性を所有し，各々の内部に在る私は，そこで出会う世界や世界内部存在者を外在する実在として体験している。そして，両者の間には，想像的現実の殺害によって客観的現実が唯一の現実になるというような関係がある。逆に言えば，想像的現実は，もし客観的現実が唯一の現実になろうとするならば殺されなければならないほど，強固な現実性を持っている。このように，象徴的体験においては，拮抗する二つの現実が同時に成立しているのである。
　象徴的現実は，これら二つの現実が分離しつつ結合することによって成り立っているが，その結合は，二つの現実の内部においては外在の体験が維持されつつ，同時に両者の分離を契機としてそれぞれが外から見られ，それによって両者とも内在として見られるという弁証法的運動によって成り立っている。また，その現実性は，感覚＝身体による存在分節，主語的論理と述語的論理の複合，共時性と因果性の複合，非対称性と対称性の複合などを契機として成り立っている。
　祭りにおける象徴的時空間の分析は，以上のような象徴的現実の構造特性を踏まえ，二つの現実の弁証法という観点から行われることが重要であることが示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①橋本朋広，象徴心理学のための基礎理論(1)―象徴的現実の構造，大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，第 2 号，9-15，2008，査読無

②橋本朋広，心理療法におけるイニシエーション・モデルの検討，大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要，創刊号，11-21，2007，査読無

〔学会発表〕（計 2 件）

①橋本朋広，春の火祭に見る火のイメージの心理学的考察，日本箱庭療法学会第 22 回大会，愛知教育大学，2008

②橋本朋広，祭りの体験と心理療法の体験の比較考察，日本箱庭療法学会第 20 回大会，京都文教大学，2006

６．研究組織
(1) 研究代表者

　　橋本　朋広（HASHIMOTO TOMOHIRO）
　　研究者番号：20324733

様式C-19（記入例）

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　　年　　月　　日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2004～2007
課題番号：１６０００００００
研究課題名（和文）　○○○○○○○○○○に関する研究

研究課題名（英文）　ＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡ

研究代表者
学振　太郎（GAKUSHIN TARO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：

研究成果の概要：○○○

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００４年度	10,000,000	3,000,000	13,000,000
２００５年度	10,000,000	3,000,000	13,000,000
２００６年度	10,000,000	3,000,000	13,000,000
２００７年度	10,000,000	3,000,000	13,000,000
年度			
総　計	40,000,000	12,000,000	52,000,000

研究分野：
科研費の分科・細目：
キーワード：

１．研究開始当初の背景
(1) ○○

(2) ○○

２．研究の目的
(1) ○○○

(2) ○○○

３．研究の方法

(1)　○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

(2)　○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

４．研究成果

(1)　○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

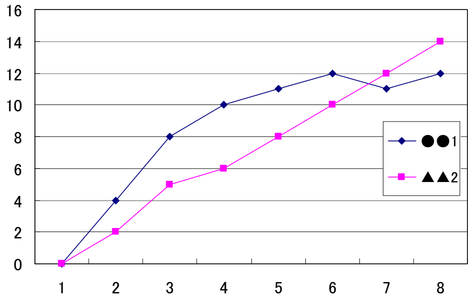

図1　○○○○○

(2)　○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

(3)　○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

(4)　○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

(5)　○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

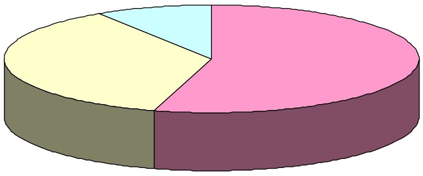

図2　○○○○○

(6)　○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○

(7) ○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○○○
○○○○○○○○○○○○○○○○○

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１０件）

① 学振太郎、半蔵門一郎、学振花子、論文名、掲載誌名、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）、査読の有無
② 学振太郎、論文名、掲載誌名、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）、査読の有無
③ 学振花子、論文名、掲載誌名、巻、最初と最後の頁、発表年（西暦）、査読の有無

〔学会発表〕（計５件）

①

②

③

〔図書〕（計２件）

①

②

〔産業財産権〕
○出願状況（計□件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計◇件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://○○○○○○○○○○○○○○○○○

６．研究組織
(1)研究代表者
学振　太郎（GAKUSHIN　TARO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：
(2)研究分担者
学振　花子（GAKUSHIN　HANAKO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：
学振　次郎（GAKUSHIN　JIRO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：
学振　三郎（GAKUSHIN　SABURO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：

(3)連携研究者
学振　四郎（GAKUSHIN　SHIRO）
○○大学・大学院理工学研究科・教授
研究者番号：